

文京ふるさと歴史館

BUNKYO MUSEUM NEWS

# だより

第11号/平成16年4月1日発行

ぶんきょう文学探訪のおすすめ	2
文の京一葉物語と一葉伝説	4
記憶のなかの文京	5
江戸の「和綴じ本」を作って	6
平成15年度のおゆみ	7
資料をご寄贈くださった方々	8
平成16年度の催し	8





## ぶんきょう 文学探訪のおすすめ

坪内逍遙・二葉亭四迷・夏目漱石・森鷗外・樋口一葉・石川啄木…多くの作家たちが、文京にくらし、あるいは文京を描いてきました。有島武郎・永井荷風のように文京区に生まれた作家もいますし、正岡子規や河東碧梧桐など地方から文京に上京、一時文京にくらしたものの、石川啄木・徳田秋声・樋口一葉・森鷗外…文京が終焉の地となったもの、さまざまです。

文京区には、そうした文京にゆかりのある作家や作品を、より身近に感じることができる場所がたくさんあります。そのうちのいくつかをご紹介します。

### 炭団坂と作家たち

文京ふるさと歴史館のすぐそばに炭団坂（本郷四丁目32と35の間）という急な坂道があります。坂名の由来は、「往昔炭団を商ふ者多く居りしに因り此称ありと、或は言ふ、此坂切立にて最も急なる坂なるを以て、往来の人転び落る故に名とすと」（『新撰東京名所図会』）とあります。現在は53段の階段坂となりましたが、急な勾配は変わっていません。坂上は本郷の台地となり、北へ向かう坂下は菊坂界隈へと続きます。その一角には、父を亡くした一葉が戸主として母・妹とともに暮らした旧居跡があります。

その炭団坂上に、かつて坪内逍遙が住んでいました。逍遙がここに住んでいた明治18年（1885）より『小説神髓』『当世書生気質』が発表されました。近代文学の狼煙が、まさにここであげられたといえるでしょう。

明治20年（1887）、逍遙の移転後、そこは旧松山藩主久松家運営の寄宿舎となり、寄宿生として正岡子規・河東碧梧桐・高浜虚子ら旧松山藩出身の（後に雑誌『ホトトギス』など俳壇で活躍する）、若い学生たちが暮らすこととなります。おそらく、ここで若さにあふれた熱い議論が交わされたことでしょう。

子規が、この炭団坂上に暮らしたのは明治21～24年のことです。一葉が、炭団坂下となる菊坂に暮らしたのは明治23～26年ですから、子規と一葉は、同時期に目と鼻の先（直線最短距離にして約50m）に暮らした間柄ということになります。松山から上京したばかりの若い学生と、父を亡くした苦勞人の戸主一葉、まもな



炭団坂 平成16年

く日本の文壇をにぎわすことになるこの二人、知らずのうちにはすれ違っていたかもしれません。興味深いところです。炭団坂を歩きながら、皆さんも想像してみてもいいでしょうか。

### 永井荷風と文京の坂道

永井荷風は、明治12年小石川区金富町（現、春日二丁目）に生まれ、幼少期をここで過ごしました。荷風文学には、彼の懐かしい記憶とともに文京の地名が数多く書きとめられています。とりわけ荷風が好んだもののひとつは、坂道でした。「坂は即ち地上に生じた波乱である」（『日和下駄』大正3年～）、荷風は坂道をこう表現しました。そして「今市中の坂にして眺望の佳なるものをあげんか…金剛寺坂・荒木坂・服部坂・大日坂などは皆齊しく小石川より牛込赤城番町辺りを見渡すによい」としています。この4つの坂道は、すべて文京区にあるもので、小石川・小日向の台地と南方向に広がる低地（神田川や、かつて神田上水が流れていたエリア）をつないでいます。現在は、高い建造物にさえぎられ、遠くまで見渡すことは少し難しくなりましたが、昭和39年（1964）の写真に荷風が見たであろう、その眺望を偲ぶことができます。

文京区は坂の多い町です。名前のあるものだけでも115ヶ所、先程ご紹介した炭団坂をはじめ、多くの坂道に作家たちが暮らし、多くの坂道が文学作品の舞台となっています。坂道にしぼって文学探訪してみるのも、文京ならではの楽しみ方ではないでしょうか。

### 無縁坂と森鷗外

森鷗外『雁』（明治44年～）の舞台として登場するのが無縁坂（湯島四丁目12と台東区池之端一丁目の間）です。

無縁坂は、律儀な岡田青年の決まりきった散歩コース、そして、お玉との出会いの場として登場します。

また無縁坂は、文学作品だけではなく、昭和50年にはTVドラマ『ひまわりの詩』の主題歌『無縁坂』として発表されました。さだまさし・吉田正美によるフォークソンググループ、グレープが歌った（作詞・作曲さだまさし）この曲には、子から見た母の人生が語られています。

文京区に数多くある坂道のなかで、この無縁坂は知名度では確実に上位となるでしょう。しかし、交通量はそれほど多くないようです。何か、物思いにふけるのに適しているような、そんな不思議な坂道です。

新坂（別称根津権現坂 根津一丁目21と28の間）もまた、



服部坂 昭和39年

鷗外作品に登場する坂道です。『青年』（明治43年～）にて、作家志望の主人公純一が作家大石狷太郎を訪問する途中の場面で「この坂はSの字をぞんざいに書いたように屈曲して附いている」と記されていることから、もう一つの異名としてS坂と呼ばれるようになりました。また鼠坂（音羽一丁目10と13の間）も森鷗外「鼠坂」（明治45年）の舞台になっています。その鷗外は団子坂上に住み、そのすぐ近くで青鞥社は発足しました。なお鷗外旧居跡は、文京区立鷗外記念本郷図書館（千駄木1-23-4）となっており、1階には鷗外記念室が設けられ、ゆかりの品々が展示されています。

## 樋口一葉日記をたどる

樋口一葉は、24年あまりの短い生涯のうち、約10年を文京の地で過ごしました。一葉は、日記をのこしています。家族のこと、小説のこと、金銭や生活のこと、友人・知人のこと、実に多様な事柄が記されています。そして、この日記のそここに文京の風景に関する記述を目にすることができます。印象的な場面をいくつかひろってみましょう。

十時ごろより曇まじりに雨降り出づ。晴てはふりふりひるにもなりぬ。よし雪にならばなれ。なじかはいとふべきとて家を出づ。真砂町のあたりより綿をちぎりたる様に大きやかなるもこまかなるも小止なくなりぬ。壺坂殿坂より車を雇ひて行く…（明治25年2月4日）

当時、菊坂に住んでいた一葉が、みぞれの降る本郷から、小説の師匠半井桃水の住む千代田区平河町へ向かう場面です。桃水に対し、一葉は小説の師匠以上の感情を抱いていたようです。

湯島の天神大祭也…日没より国子と共に拜礼に行。山車は切通し坂に一ツ有のみ成けり。社内より新花町の方へ出んとて、吉田君の表をよぎりし…

（明治24年10月10日）

夕暮より国子と共に散歩をなす。右京山に虫を聞て夫より田町通り本郷の台にのぼりて大学前あたりを遊びて帰る。二人にて母君のみみ療治をなす。臥させ奉りてより近松の浄瑠璃集をよむ…（明治25年9月18日）

一日家の中の掃除などして日没前に何ごともなし終りたり。いざとて国子と共に買物がてら下町の景気みに行く。本郷通りより明神坂を下り、多町にものを買ひて小川町の景気を眺め、三崎町に半井君の店先を眺めぬ…

（明治25年12月31日）

日記を見ると、一葉は散歩を好んだようです。夕方より妹国子と連れ立って散歩をすることが多く、二人で訪れた先は、湯島天満宮（湯島3-30-1）、お茶の水橋（落成見物、月見など）、福聚院（小石川3-2-23）の大黒天、本郷通りにあった勧工場、時には現在の千代田区三崎町あたりにあった桃水の寓居を眺めて帰ってくるようなこともしています。また一葉は、花を見ることも好きだったようで、護国寺、あるいは、つつじを見に根津神社・小石川植物園を訪れたり、右京山には「花を尋ぬ」や虫聞きなどで数度訪れています。日記のなかには、大宮公園（埼玉県さいたま市）を訪れ「秋草を見る」という記述がありますが（明治25年9月26日）、そのほか、ほとんど東京から出ることはなかったようです。戸主として家を空けるわけにはいかなかったのかもしれませんが。日記に散見される自宅周囲への散歩は、一葉にとって外の世界を見る貴重な機会だったのではないのでしょうか。

また一葉の作品の中にも、文京を舞台としたものはいくつか見られます。「ゆく雲」には、主人公の下宿先隣りとして、一葉自身が幼少の頃親しんだ法真寺（本郷5-27-11）や腰衣観音が、「経つくえ」には、主人公お園の暮らす場所として本郷森川町が、「うつせみ」においても主人公の暮らす場所として小石川植物園近くが登場しています。

また代表作ともいわれる「にぎりえ」は、「新開の町」を舞台とした作品で、源覚寺（小石川2-23-14）のこんやくえんま（閻魔王坐像）縁日と思われる描写が、作品において重要な場面となっています。

一葉の日記や作品を読みながら、文京のまちを散策するのもおすすめです。

ここで紹介したのは、ほんの一例にすぎません。文京区には、近代文学をより身近に感じることでできるゆかりのスポットが、ほかにもたくさんあります。昨年度の特展は、「樋口一葉 その生涯—明治の文京を舞台に—」ということで、文京に生きた樋口一葉をテーマとしたものでした。たくさんのお客様に来館いただき、好評を得ることができました。文京ふるさと歴史館では、今後もこうした文京にゆかりのある文学作品や作家をテーマとした展示・調査活動を続けていく方針です。

《参考文献》

（東條幸太郎）

『ぶんきょうの坂道』戸畑忠政編著、文京区教育委員会、2001年  
『樋口一葉日記（翻刻）』鈴木淳・樋口智子編、2002年、岩波書店



無縁坂 昭和39年 太田峻三氏撮影・提供



新坂（根津権現坂・S坂）昭和36年

## 文の京一葉物語と一葉伝説

### 知ってますか？「文の京一葉物語」

文京区では、「文の京一葉物語」という名称によって平成15年度から16年度にかけてさまざまな事業を繰り広げています。何故か世間一般では「樋口一葉」というと一葉記念館のある台東区の竜泉が有名で、文京区にゆかりのある作家としてはあまり知られていない



ということがあるのです。考えてみますと、この竜泉（当時は竜泉寺町或いは俗に大音寺前と呼ばれた）を舞台として生まれた名作「たけくらべ」があまりにも有名でそのイメージが強いかからでしょうか。確かに「たけくらべ」は一葉の書いた多くの名作の中でも飛びぬけたもので、いまだにその輝きはいささかも衰えてはいませんから、しかたが無いのかもしれませんが、「作家 樋口一葉」としてその全体像を見ますと、「たけくらべ」をはじめとする代表作の全ては、文京・本郷で著しており、また、日記をみますと、一葉が日々の生活の中で歩いたところ、見た光景などには私たちに馴染みのある場所が頻りにでてきます。

今年の秋には一葉が新たな5千円札の顔になります。最期まで遣り繰りに泣き泣きとしていた一葉には皮肉なような気がします。しかし、これを機に「樋口一葉」に関心を持つ方が増え、それとともに一葉ゆかりの地「文京・本郷」の知名度があがることを竜泉の国の一葉さんも喜んでくれるのではないかと考えております。

### 一葉伝説（語られる一葉）

さて、「文の京一葉物語」を記念して開催された特別展「樋口一葉 その生涯」には、例年の特別展に倍する来場者がありました。多彩で豊富な実物資料を展示することができ、評判もかなりよかったです。この特別展の準備段階でいろいろな参考文献を漁ったりしましたが、その中で特に興味深かったのは、一葉亡き後交流のあった人々が書いたものを集めた小学館版全集の『一葉伝説』です。この中の話は既に多くの作家や研究者などが一葉について語る時に引用する挿話もあり、大変面白い読み物となっています。その中から、幾つかをここで紹介してみましよう。

### 穴澤清次郎の話

一葉より5歳年下ということもあったのか、気を許していろいろな面を見せた様子。氏は日記によく出てくる西村 鉏之助の家に寄宿して高等学校の受験準備していました。一葉から国文を習ったりするため、頻りに一葉宅に出入していたようです。穴澤清次郎の話した一葉の逸話が面白いのは、素顔の一葉が良くでてきていることだと思います。

次に紹介するのは、いずれも終わりに一葉特有の笑い癖が出てくることです。

#### 〈一葉流速読術〉

七つの年に3日で八犬伝を読んだと申しますので、よくそんなに早く読み上げた私が云うと、「目が二つあるから2行読めるでせう。ほ、ほ、ほ」と夏ちゃんが云いました。

#### 〈皮肉屋一葉〉

当時名声噴々の下田歌子女士について、女でもなかなか偉いものですね、と話しを持ちかけた時、一葉さんは軽い笑顔を見せながら、「下田さんは女だから世間から騒がれるのですよ。あのぐらいな者、男の中には掃く程おりますよ。女だから得をして居るのですね、ホ、ホ、ホ、ホ。」

#### 〈きつい冗談をいう一葉〉

安井哲子さんのことは大変ほめていましたが、野々宮菊子さんは心の中であざ笑っていたようです。あるとき野々宮さんが一葉さんに、「私は多情よ」と申しますと、一葉さんは「多情は犬ですよ」とずばりと極め付けて、ほ、ほ、ほ、と笑ったことがありました。

### 病床の一葉が語ったこと

『文学界』同人の馬場孤蝶や戸川秋骨は丸山福山町の一葉宅を頻りに訪ねていましたが、臨終近く見舞った折に一葉が語った話を遺しています。

馬場孤蝶は、11月3、4日頃に暇乞いに行った。私が「この歳暮には又帰ってきますから、その時又お目にかかりましょう」といったら、一葉はうめくような苦しそうな声で「その時分には私は何になっていましょう、石にでもなっていますか」ときれぎれに言った。

戸川秋骨は、臨終近く（明治29年10月下旬頃）斎藤緑雨から危篤との知らせがもたらされ、見舞いに訪れる。そのときの話に、「例のとおりな美しい、そして才気のほのみえる言葉づかいで暫く話しをされた、『皆様が野辺をそぞろ歩いておいでの時には、蝶にでもなってお袖の辺りに戯れまはりませう』などといわれた事は、今でもよく覚えている。」

この2つの逸話は有名なようで、井上ひさし氏の芝居「頭痛肩こり樋口一葉」の台詞にも巧みに使われていたように思います。それにしても一葉が臨終の床にあってさえも、自身の死を冷徹な目で捉え、幾分かの諧謔を含んだ詩的な言葉で表現したのはただ驚くばかりです。予めその生涯が25年に満たないのを知っていたかのような気さえします。

（宮前一雄）



## 『記憶のなかの文京』 民俗調査報告書の刊行とその意義

みなさんは「歴史」という言葉から何を連想されるでしょうか。多くの方が、日本史・世界史といった学校で学習する歴史の授業を思い浮かべるのではないかと思います。その一方で、教科書には出てこない歴史があります。それは、わたしたちの生活の歴史です。人は生まれてから死ぬまでの一生のなかで、一日・一ヶ月・一年と毎日の暮らしを積み重ねていきます。そしてその暮らしの歴史はひとりひとり異なり、またそれを取り巻く家族・地域・環境・年代などによってさまざまに変化していきます。そういった人の暮らしの移り変わり、すなわち日々の生活の歴史を調査・研究していくのが民俗史といわれるものなのです。

文京ふるさと歴史館では、今年度『記憶のなかの文京』と題した民俗調査報告書を刊行する予定です。文京区全域を対象に、そこに暮らすみなさんから聞き取り調査を実施し、その結果をいくつかの項目に分類してまとめたといった体裁のもので、ではその報告書がどのような内容のものになるのかを簡単にみていくことにしましょう。

### ①社会生活

区や町会といった地域単位における生活史を＜社会＞といい、町会の組織（役員の種類・選出・任期など）や町会の活動・行事などがこれにあたります。また、個々の家を単位にした生活史も＜社会＞の分類に含まれます。家族のことをどのように呼んでいるか、親戚とはどのようにお付き合いをしているか、などがこれにあたります。すなわち、毎日の生活の基盤となる場における生活の変化といえるでしょう。

### ②経済生活

生産と消費を中心にした生活を＜経済＞といいます。さまざまな項目が含まれてくる分類ですが、おもだったものとして以下のようなものがあげられます。まず、衣・食・住に関する生活の変化について。衣食住の変遷は時代の変化と密接な関わりがあります。次に、交通と交易について。これは特に道路と交通の発展や商店街などの街の移り変わりが中心です。そして生業に関するもの。サラリーマン家庭なのか製造業に従事するのかといったことは生活の基盤となる重要な要素であり、文京区ならではの商いや伝統工芸などがこれに含まれます。

### ③儀礼生活

ある特定の時期に行われるさまざまな行事を総称して＜儀礼＞といいます。＜儀礼＞は大きくふたつに分類することができ、人がこの世に生まれてから死ぬまでの一生を人生儀礼、家毎に行われる一年間の行事を年中行事といいます。人生儀礼には大きく分けて産育・婚姻・葬送があります。産育とは出産と育児のことで、安産祈願・出産の場所・産婆・宮参り・七五三などがこれにあたります。婚姻では、結納や結婚式の形態の変化などが中心となります。葬送は、葬式・墓地・年忌供養などのことをいいます。年中行事は正月・春秋彼岸・盆など一般的な行事のことを指



白山神社祭礼の子どもたち  
昭和32年（1957）菊地妙子氏所蔵

し、家によって異なる点が多い事柄といえます。

### ④信仰生活

神社や寺院に対する信仰やその行事に関する事項全般を＜信仰＞といいます。対象となる神社や寺院は、文京区内はもちろんのこと隣接区から遠隔地の寺社まで広範囲にあたります。具体的にみていくと、神社の祭礼組織と行事の運営・寺院で行われるさまざまな行事・種々の御利益で知られる地蔵などの石造仏や近隣の寺社に対する信仰・富士山や伊勢神宮といった遠隔地への信仰（代参）などがあげられます。

ここに示したのは、ごく一般的な民俗調査報告書の分類項目です。それでは、文京区の特徴としてどのような点が考えられるでしょうか。近世以降、東京は政治や文化の中心地であり、さらに文京区はほぼその中央にあります。この点からいえば、農・山・漁村にみられるような典型的な民俗文化とは異なる、いわゆる都市の民俗史であるといえます。また、歴史的な事実からみれば、関東大震災や第二次世界大戦下の東京大空襲による被害や、東京オリンピック開催を契機に展開された高度経済成長・都市化・環境の変化・交通網の整備なども、ひとつひとつの暮らしを大きく変化させたひとつの要因といえましょう。

みなさんのなかには、「もっと早く調査を実施していれば」と思われた方も多いのではないのでしょうか。もちろん、聞き取り調査を主体とした調査報告書ですからより高齢の方にお話をうかがうことができればそれに越したことはない、というのも事実です。しかし、民俗史というのは伝承されてきた生活の歴史がその基本となります。毎日の暮らしの積み重ねのなかで何気なく繰り返されてきたことこそが重要なものであり、そのなかから文京区の特徴といえるものを考察していくことこそが、この民俗調査報告書の大切な意義のひとつなのです。

現時点での民俗調査による報告書を刊行することは、現在にいたるまでの文京区的生活史を切り取り、資料として提示することです。この未来につながるみなさんの暮らしの歴史資料をぜひ一度お読みいただき、懐かしさに思いを馳せるとともに、これからの文京区をみつめる契機にしていだければと思います。

（田中 斉）

# 江戸の「和綴じ本」を作って

文京ふるさと歴史館では、毎年8月に「小・中学生のための歴史教室」を開催しています。平成15年度は、江戸開府400年記念にちなみ、「江戸の“和綴じ本”をつくろう」と題して、8月20日と23日の二回にわたって、子どもたちと一緒に和綴じ本の製作に挑戦しました。参加した小・中学生が和綴じ本を自作することで、江戸時代を身近に感じてもらうことが目的でした。

江戸時代の日本人が読書を好んだことはよく知られています。四書五経のような武士が教訓とする本だけでなく、庶民向けの娯楽本も多く出版されており、その識字率の高さは特筆すべきものでした。そのような中で本は、日本人の生活に深く関わってきました。

江戸時代の本には、さまざまな決まり事があり、本の各部位の名称なども細かく定められています(図1参照)。また本の装幀によって「卷子本」、「折本」、「大和綴」、「袋綴」などの呼び名があり、さらに「袋綴」には綴じ方によって「四つ目綴」や「康熙綴」などに分類されています。これらの本が、まとめて「和綴じ本」と呼ばれています。

江戸時代には、出版物をはじめとして、個人の日記から検地帳や御触留のような記録類にいたるまで、実にさまざまなものが「和綴じ」の技法で装幀されていました。しかし明治時代になると、本が大量生産されるようになった影響で、本の背を糊で貼りつける洋装本が一般的となり、「和綴じ」の出版物は見かけることも稀になりました。現在では、日常生活の中で紙を綴じることすらなくなってしまうために、和綴じ本にはすっかり貴重本のイメージがついてしまいましたが、本来は日本の風土や日本人の性質に適した、大変身近なものでした。

和綴じ本の一番の特徴は、何度でも簡単に綴じ直すことができることにあります。本をバラバラにして自分の利用する部分だけを集めて綴じ直したり、本の中に別の紙を

綴じ込んだりすることで、自分だけの本を作ることができます。また、古くなった本に新しい表紙をつけ、新しい糸で綴じ直すことで、本を再生することもできます。この様に、本を作り替えたり再生したりすることは、現在の主流となっている洋装本では、簡単にはできません。

今回の歴史教室では、和綴じ本作りの中でも最終工程にあたる、「綴じ」の工程を行いました。この工程では、「中綴じ」、「表紙の製作」、「本綴じ」の3つの作業を行います。今回は、さまざまな和綴じの技法の中から、「四つ目綴」で装幀を行いました。「四つ目綴」とは、糸と紙縫を使って紙を綴じる「袋綴」の一種で、本の背の部分に四つの綴じ穴を開けるために「四針眼訂法」とも呼ばれる、江戸時代の出版物では最も一般的な本の装幀でした。

まず始めに、2つ折りにした和紙を紙縫で綴じる「中綴じ」を行いました。そろえた和紙に千枚通しで穴を開け、その穴に紙縫を通して結び、不要な部分を切り落として、目打ちをします。次に、色鮮やかな和紙を使って表紙を作りました。歴史館で事前に用意したさまざまな模様の和紙の中から、子どもたちが自分用の表紙を選び、台紙に合わせて紙を折り込み、和糊を使って「見返し」に紙を貼って表紙を作りました。最後に、「中綴じ」したものと「表紙」をまとめて綴じる「本綴じ」を行いました。「四つ目綴」を行うために、本の背にあたる部分に千枚通しを使って四ヶ所の穴を開け、それらの穴に所定の順番に従って製本針を使って綴じ糸を通します。「本綴じ」をした後、通した綴じ糸で結び目を作り、糸を留める作業を行って和綴じ本は完成しますが、結び目を作る作業では和綴じ本に独特の結び方をするために、多くの子どもたちが戸惑っていました。

子どもたちは、「千枚通し」や「和糊」、「製本針」など、普段使い慣れない道具を使っての作業に四苦八苦していましたが、なんとか無事に全員が自分だけの「和綴じ本」を持って帰ってもらうことができました。針と糸を使った作業では、学校で裁縫の授業を受けている高学年の子どもたちが年少の子どもたちを手伝う場面も見られました。

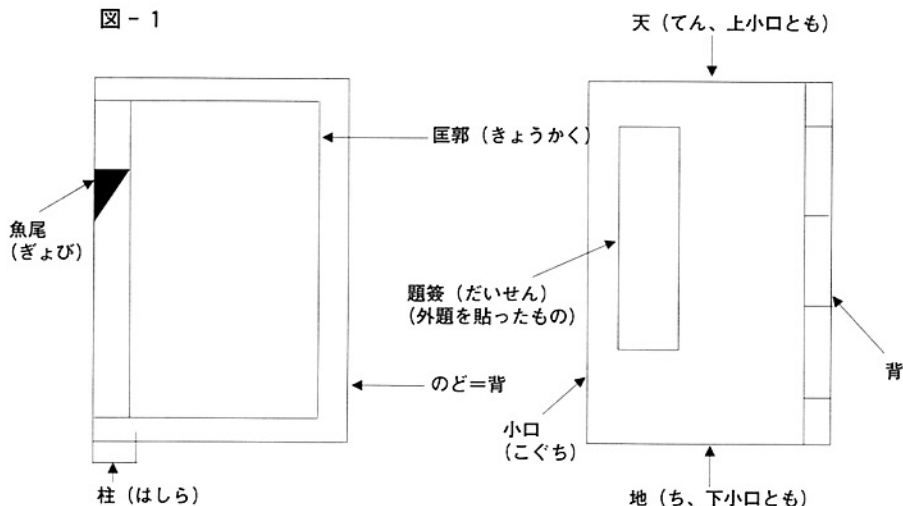
また、「千枚通し」などの道具を使用する際には、子どもたちが年長の子を中心として、自分たちで順番を決めて譲りあうなど、作業を効率的にこなしたり安全に進めたりするために自分たちで考えて実行に移していたところを見ると、和綴じ本に親しむ以外にも、歴史教室の効果があつたのではないかと考えられました。

「始める前には難しそうに思えたが、実際にやってみると思ったよりも簡単だった」といった感想もあり、参加した小・中学生には和綴じ本に親しんで帰ってもらうことができました。

最後になりましたが、今回の教室においてご協力・ご助言を賜りました、埼玉県文書館・山形屋紙店・鳥海書房の皆様ならびに小笠原亮氏にこの場を借りて御礼申し上げます。

(加藤芳典)

図-1



# 平成15年度のあゆみ

## 区民大学・文京の歴史講座

### 「江戸の文芸と出版」(全5回)

- ◆5月11日(日)「時代の演出者—蔦屋重三郎の仕事—」  
／鈴木俊幸氏(中央大学文学部教授) 参加者……98人
- ◆5月18日(日)「落語はどのようにして形成されたか」  
／延広真治氏(帝京大学教授) 参加者……95人
- ◆5月25日(日)「曲亭馬琴と八犬伝」  
／高木元氏(千葉大学文学部教授) 参加者……97人
- ◆6月1日(日)「ニューメディアの開発者—黄表紙の鼻祖・恋川春町—」  
／宇田敏彦氏(東洋大学大学院講師) 参加者……92人
- ◆6月8日(日)「行楽の鉄人—天明狂歌のチャンピオン・大田南畝—」  
／宇田敏彦氏 参加者……91人



歴史講座

## 伝統工芸展

### 「文京の匠たち—和紙をめぐる技と文化—」

- ◆6月21日(土)～7月27日(日)(延べ32日間)  
入館者数(製作実演観覧者、体験教室・工房見学会参加者を含む)2,765人
- ◆製作実演 6月26日(木)～29日(日)、7月3日(木)～6日(日)  
木版画／伊藤智郎氏・品川勝男氏・福田裕氏・山口徹三氏・岩城竹男氏・  
剣持昭正氏  
江戸提灯／柴田慶一氏、江戸唐紙／小泉幸雄氏、江戸姉様人形／高際牧子氏  
江戸表具／高橋文三郎氏
- ◆体験教室 会場：男女平等センター  
7月12日(土)「折紙教室」／小林一夫氏 参加者……18人  
7月13日(日)「ポチ袋づくり」／高橋由貴子氏 参加者……23人  
7月24日(木)「提灯づくり」／柴田慶一氏 参加者……34人
- ◆工房見学会 7月19日(土)  
小泉襖紙加工所(江戸唐紙)、ゆしまの小林(江戸千代紙) 参加者……27人

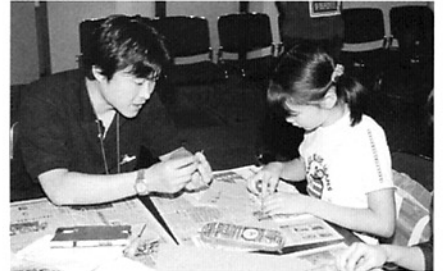


和紙の神様を祀る天日鷲神社

## 小・中学生のための歴史教室

### 「江戸の和綴じ本をつくろう」

- ◆第1回 8月20日(木) 参加者……21人
- ◆第2回 8月23日(日) 参加者……18人



小・中学生のための歴史教室

## 特別展

### 「樋口一葉 その生涯—明治の文京を舞台に—」

- ◆10月25日(土)～12月7日(日)(延べ38日間)  
入館者数(講演会、朗読講座参加者含む)……8,685人
- ◆記念講演会 会場：男女平等センター  
11月1日(土)「時代の中の一葉—女性作家であること—」  
／菅聡子氏(お茶の水女子大学助教授) 参加者……124人  
11月22日(土)「一葉の四季」  
／森まゆみ氏(作家) 参加者……161人
- ◆記念朗読講座 会場：男女平等センター  
11月30日(日)／幸田弘子氏 参加者……99人  
12月7日(日)／池田一臣氏 参加者……72人  
12月14日(日)／幸田弘子氏 参加者……79人
- ◆関連事業(文の京—葉物語)  
井上ひさし氏講演会「一葉とはナニモノか」  
11月16日(日) シビックホール小ホール 参加者……353人  
文京一葉忌(法要、講演、朗読、旧伊勢屋質店公開、史跡めぐり)  
11月23日(日) 法真寺



特別展